

本書の背景となるマクロ動学の諸理論をサーベイしている。

最近のマクロ経済学では、ニュー・クラシカルのマクロ経済学による批判を受けてミクロ的基礎の重要性が強調されるようになり、ケインジアンのマクロ経済学においてもニュー・ケインジアンのような新しいアプローチが生まれてきた。ただ、ニュー・ケインジアンの理論では、ミクロ的基礎が重要視されるあまり、総需要分析を中心とする伝統的なケインジアンの重要な成果も無視される傾向がある。ニュー・ケインジアンの理論では、景気循環の現象も、多くの場合、静学的なモデルにおけるショックの効果として捉えられ、時間を通じての経済の変動を明らかにするような議論はほとんど行われなくなってきている。本書は、伝統的なケインジアンの景気循環理論に立ち帰り、最近開発された動学的分析手法を駆使することによって新しい展開を試み、伝統的なケインジアンのマクロ動学を復活させる試みとして位置づけられよう。ただ単に流行を追いかけるのではなく、過去の重要な成果にじっくりと取り組み、かつ新しい分析手法を取り入れながらそれを発展させようとする著者の研究姿勢は貴重であると考えられる。

2. 本書の概要

第I部「カルドア型景気循環モデルの展開」では、カルドアの非線型景気循環モデルを次の2点で拡張している。第一は、カルドア・モデルに政府の金融・財政部門を導入し、マクロ安定化政策によって景気循環を制御できるかどうかを検討している点であり(第1章、第2章)、第二は、カルドア・モデルを開放経済モデルに拡張し、固定相場制と変動相場制という代替的な為替制度のもとで経済の安定性を検討している点である(第3章)。

第II部「グッドウィン、カレツキ、循環的成長」では、グッドウィンとカレツキの非線型モデル、およびケインズ=ヴィクセル型の貨幣的成長モデルを次の点で拡張している。第一は、実物部門しか考慮していないグッドウィンの循環的成長モデルに金融部門を導入し、「マネタリスト・ルール」にもとづく中立的金融政策と、「アクティビスト・ルール」にもとづく安定化金融政策とを比較分析している点である。第二は、カレツキ・モデルに政府部門と金融部門を導入し、投資の懐妊期間より長い周期をもつ景気循環という意味での「大循環」が存在するための条件を検討している点である。第三は、スタイン

浅 田 統 一 郎

『成長と循環のマクロ動学』

日本経済評論社 1997.12 xi+368 ページ

1. はじめに

本書は、伝統的なケインジアンのマクロ動学に関する理論を、著者がこれまでに内外の学術雑誌に発表されてきた論文を基礎にしながら、体系的にまとめられたものである。カルドア型の非線型景気循環モデルを拡張した第I部(第1章—第3章)、グッドウィンおよびカレツキの非線型景気循環理論を拡張した第II部(第4章—第6章)、および投資関数の理論を展開した第III部(第7章—第9章)の3部からなる。この他、序章では、第1章以降で取り扱われているテーマに関する予備知識を提供するために、

等によって展開された「ケインズ・ヴィクセル・モデル」と呼ばれる貨幣的成長モデルを用いて、財市場での競争の程度がマクロ経済の動学的安定性にどのような影響を与えるかを分析している点である。結論としては、独占度の高い経済の方が動学的に不安定であることを示している。

第III部「投資関数の理論」では、投資関数のミクロ的基礎づけに関して、二つの新しい展開を行っている。第一は、カレツキの「危険逡増の原理」にもとづく投資関数を導出することによって、ポスト・ケインジアン投資関数のミクロ的基礎づけを行った点である。第二は、資本市場が不完全な場合を考えることによって、投資と資金調達を同時に分析した点である。

3. 本書の貢献

以上のように、本書は各章になんらかの新しい試みを含んでいるが、本書の貢献としては、大きくまとめて次の3点を挙げておきたい。

(1)第I部と第II部を通じてのマクロ安定化政策の分析は、非線型景気循環モデルを用いた動学的分析であり、景気循環の制御の問題を真正面から扱った分析であるといえよう。分析結果は、通常のケインジアン的な安定化政策(すなわち、政府支出を逆循環的に変化させる政策)を支持するものとなっている。しかし、その結果を従来の静学的モデル分析とは異なり、非線型景気循環モデルによる動学的分析から導出した点に本書の貢献が認められる。また、その安定化政策は無条件に成功するわけではなく、さまざまな条件が必要であることが明らかにされ、それらの条件が詳細に分析されている。

(2)第6章における競争度(または独占度)とマクロ経済の動学的安定性の関係に関する分析は、これまであまり行われておらず、希少価値のある分析である。特に、この章の分析は、金融部門と実物部門の相互作用を考慮しているという点で従来の研究を一步前進させている。しかもその分析結果は、従来の支配的な見解(競争的経済よりも独占的な経済の方が動学的安定性は高いというもの)が否定される可能性のあることを明らかにしている。

(3)第III部における投資関数のミクロ的基礎づけに関する分析において、カレツキの「危険逡増の原理」によるミクロ的基礎づけを行っている点は、それが新しい試みであるということとともに、その考え方が現実性をもつという点からも評価できる。さ

らに、著者は、同じ仮説を基礎としながら、投資と資金調達の同時決定をミクロ的に分析している。このような分析はこれまでほとんどなく、今後の発展性が期待できる試みとして評価できる。

4. 批判的コメント

以上に挙げた貢献を十分評価した上で、以下では通常の書評としての義務を果たすため、いくつかの批判的コメントを行う。

第一に指摘されるべき点は、第I部と第II部のマクロモデルでは、そのミクロ的基礎の議論がほとんど行われていない点である。ミクロ的基礎を重視するあまり、総需要分析の成果を無視するという最近の一部の傾向は極端すぎると思うが、マクロ的現象を経済主体の行動にもとづいて説明するという精神そのものは重要である。本書で論じられているマクロ経済政策の安定化の条件は、さまざまなパラメータの大小関係によって表されるが、それらの条件の経済的意味を明らかにするためには、究極的にはそれらのパラメータを経済主体の行動、市場条件、技術条件などによって説明することが望まれる。一例を挙げると、財市場の調整速度(α)は安定条件において重要な役割を果たしているが、その大きさがなによって決まるかについては明快な議論がなされていない。第6章では、そのパラメータは競争度の減少関数であるという仮定がなされている。しかし、この仮定は競争企業及び寡占企業の行動や市場の性質によってミクロ的に根拠づけられたものでないのみならず、通常の競争度の定義との関係も明らかにされておらず、説得力に欠ける。経済主体の行動を示すさまざまな関数も、アドホックな仮定に終わっている。

第二に、上のコメントと若干関わりがあるが、著者がいわゆる「ルーカス批判」についてどう考えているかということについての著者の見解が明らかにされていないという点である。ルーカスは政府の政策が個人の行動の変更をもたらす可能性を指摘することによって、伝統的なケインジアンモデルで政府の政策の効果を論じることを批判した。著者のモデルに即して言えば、投資関数や消費関数は政府の政策が導入される前後において変化しないと仮定されているが、ルーカスの批判はこの仮定に向けられたのである。著者は、おそらくルーカスの議論に反対か、あるいはそれを重視しない立場をとっておられると推察される。しかし、第一部と第二部では政

策効果の議論が中心になっているこの問題に対して
どういう立場をとるかについては一言触れておくこ
とが望ましいと思われる。

第三に、第 III 部における投資関数のミクロ的基
礎づけの議論は、興味深いオリジナルな貢献を含ん
でいるのであるが、その結果が第 I 部および第 II 部
におけるマクロ安定化政策の分析にほとんど生かさ
れていない点である。カレツキの「危険逡増の原
理」や不完全資本市場での資金調達に関する興味深
い議論も、マクロ的分析になんらかの形で結びつけ
ることによってはじめて、もっと生きてくるのでは
ないかと思われる。

以上、いくつかの批判的なコメントを行ったが、
本書の各章を独立にみると、それらの多くは国内外
の学術雑誌に発表されてすでに一定の評価を得たも

のであり、それぞれオリジナルな貢献を含んでいる。
また、序章におけるマクロ動学分析手法の解説も、
初学者をこの分野へ導入するものとして大いに参考
になる。ただ、異なる章の間のつながりがどのよう
になっているかが必ずしも明確でなく、本書全体と
してみるとストーリー性に欠けているという印象を
もった。さらに、最近のマクロ経済学の新しい動向
にもかかわらず、伝統的なケインジアンの延長線上
で分析を展開することの意義について、より積極的
に著者の見解を述べて欲しいという感想をもった。
それにもかかわらず、本書は著者の手堅い分析によ
って、伝統的ケインジアンのマクロ動学をいくつか
の方向で発展させた優れた著作であると評価できる。

[足立英之]